



# KAZE NI KIKU

会期 2019年10月18日(金) 19:00開演、19日(土) 13:30／17:30開演(3公演)  
会場 クリエイティブスタジオ(札幌市民交流プラザ3階)  
入場料 全席自由 一般前売3,000円／当日3,500円、U25前売2,000円／当日2,500円  
主催 札幌文化芸術劇場 hitaru・札幌文化芸術交流センター SCARTS(札幌市芸術文化財団)  
後援 札幌市、札幌市教育委員会  
助成 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
出演 能藤玲子  
稻村泰江、五十嵐里香、東佐由理、伊藤葉子、齋藤千春、  
伊藤有紀(いずれも能藤玲子創作舞踊団)  
創作・演出 能藤玲子  
舞台美術 砂澤ビッキ

札幌を拠点に長く活動を続けてきた舞踊家、能藤玲子の創作・演出による舞台公演を開催しました。能藤はこれまでに、砂澤ビッキの彫刻作品《風に聴く》(旧題「四つの風B」)と共に舞う「風に聴く」を2度行っています\*が、本作は「風に聴く—みたびまみえる—」として、新たに創作されたものです。ビッキによる彫刻作品と、ステージを囲むようコの字型に配置された客席とで構成されたシンプルな空間の中で、蠢き、時につむじ風のように集まり散らばっていく踊り手たちの舞と、その中にあって厳かで圧倒的な存在感を放つ能藤の舞によって、自然への畏敬と、生命の循環を表現するような舞台となりました。屋外に巨大な彫刻作品を設置し、風雨に晒されることで変化していくさまを、「自然が『風雪』という名の鑿<sup>のみ</sup>を加える」と語ったビッキの自然観と、能藤のダンス表現に対する思考が結実した本作は、1年以上をかけ稽古を重ね、クリエイティブスタジオでの10日間の創作期間を経て完成しました。

\*北海道厚生年金会館での初演(1986年)と、神奈川県立近代美術館 葉山で開催された「木魂を彫る 砂澤ビッキ展」でのダンスパフォーマンス(2017年)

## 能藤玲子

舞踊家。1931年網走市生まれ。6歳から9年間日舞藤間流に入門。1949年北海道府立網走高等女学校卒業、網走市立第二中学校教員。1951年現代舞踊家・邦正美氏に師事。1959年札幌に創作舞踊研究所を開所。89歳の現在まで札幌で定期公演35回のほか、東京などで新作を次々発表。芸術祭優秀賞、札幌市民芸術賞、現代舞踊フェスティバル優秀賞、北海道文化賞、松山バレエ団芸術賞、江口隆哉賞など受賞多数。海外公演もニューヨーク、ギリシャ、パリ、モスクワなど多数。2020年、本作「風に聴く—みたびまみえる—」によって2019年度第51回舞踊批評家協会賞を受賞。

## 砂澤ビッキ

プロフィールはp.197参照。

## 「風に聴く—みたびまみえる—」公演記録

吉崎元章

(札幌文化芸術交流センター SCRATS プログラムディレクター)

「空間形成としてのダンス」を希求する能藤玲子は、ステージ上のダンサーの配置や動きの関連性を重視すると共に、体の動き自体にも、音楽に合わせたものではない、内面から湧き出てくるものの現前としての必然性を求めていた。説明的な物語性が除かれたこの公演に対してさまざまな解釈が可能であろうが、舞台美術として用いた砂澤ビッキの彫刻との関わりを中心に、記していきたい。

### 開演30分前。

入場した観客がまず目にするのは、暗い舞台上に配置された砂澤の《風に聴く》の4つのパートである。弱いスポットライトで美しいノミ跡が強調されながら、3体は屹立し、1体は横たわっている。ステージ背面の壁には、この彫刻作品のもうひとつの長さ6mの巨木部の写真がモノトーンで映し出され、会場全体には風音が響いている。美術館の展示とは明らかに異なる、光と音で演出された様相に、何か新たなことが始まろうとしている期待が高まる。その一方で、今回、この彫刻が完全な姿ではなく、一部のみを使用することにも気付くはずだ。それは、札幌市民交流プラザの3階に位置する会場にこの大きなパートを安全に運び込むことが建物の構造上どうしても叶わなかつたことに由来するが、能藤はその条件を前向きに捉え、新たな物語を紡ぎだした。能藤が、最初にこの彫刻を用いて北海道厚生年金会館で公演してから33年、砂澤が亡くなつてからも30年の月日が流れた。

今回の公演は、単なる再演ではない。その間、自分に、そして社会に起きたさまざまな出来事や、その中の考え方やものの捉え方の変化をここに新たな表現として凝縮させているのだ。今回搬入できなかつたパートを舟に見立て、砂澤がその舟に乗り天空に旅立つた後の世界がそこにはイメージされている。

また、用いられた4つのパートのうちひとつを横にするという構成は、札幌芸術の森野外美術館にある

砂澤の《四つの風》の倒壊した姿を想起させる。今回使用する《風に聴く》は、もともとは「四つの風B」と題されており、野外美術館の《四つの風》と同じときに北大研究林から伐り出された木材が使われた、言わば兄弟彫刻である。同じ年に制作されたこのふたつの彫刻の片方には、屋外設置により「風雪」という名の鑿が加わり、時の流れと自然の摂理が如実に刻まれ続けてきた。この舞台上の作品配置からも、その残酷なまでの時の流れを感じずにはいられない。そして、このあと展開される公演全体にも、こうした砂澤の自然観、芸術観を強く表すこの彫刻へのオマージュが通底しているのである。



### ステージが始まる。

暗い中、左手奥から這うように流れ込むスモークと共に静かにダンサーが入场し、背景の映像が消え舞台が暗転。それまで流れていた風の音に、鐘の音と尺八の幽玄な音楽が重なり、床に伏した6人のダンサーが青い光に照らされて各々に蠢き出す。そこには能藤の故郷のオホーツクの流水のイメージがあるのだという。それは、苛酷な環境の中で必至に生きようとする生命の抗いであり、やがてそれらは自立し、時にはつむじ風のように回転し、次第に集まり、群舞へと発展していく。動きを揃えた6人の舞いは風の化身となり、時に穂を揺らし、時に荒れ狂う嵐となり、風の諸相を見せていく。



### 開始から15分。

能藤が登場する。ダンサーたちは、舞台の奥でひれ伏すように頭を下げ微動だにしない。いつしか音楽は消えて自然音のみとなっている。先ほどまでのダンサーたちの激しい動きとは対照的に、能藤は腰を落とし背筋を伸ばしてゆっくりと歩みを進める。その圧倒的な存在感に空気が一変する。一つひとつの所作はゆるやかだが、内に満ちた力が全身から発せられている。それはまさに風を司る神の姿であり、醸し出される王者の風格は、砂澤ビッキのそれと重なる。風音に加え雨音や遠雷が聞こえる中、彫刻をめぐる姿には、「風雪」という名の鑿の具現化が感じられると共に、能藤が近づき念を送るように舞うごとに各パートを照らす青白いライトが温かな色合いに変わる様子は、あたかも生命を吹き込んでいるかのようである。その相反する作用に砂澤の詩が頭に浮かぶ。「風よ／お前は四頭四脚の獣／お前は乱暴なだけに／人間達はお前の中間のひとときを愛する／それを四季という（後略）」。砂澤は《四つの風》に四季を重ねた。能藤もまた、「風に聴く」の初演を4部作で上演し、四季を表した。今回の稽古時にも能藤はそれぞれのパートに春夏秋冬の愛称を付けていた。これは、人々に試練と恵みを与える四季を、風の神王と化してめぐることを通して、自然への畏敬を、そして自然と人との関わりを象徴し表すものなのだ。



### 再びダンサーたちが動きはじめる。

ふたりのダンサーの絡みを中心に関連される中、能藤は、屹立する3体のパートの近くで立ち尽くしている。それは、横たわる1体に代わって、「四つの風」の一部として、彫刻と同化しているかのようである。ダンサーたちの群舞の中にも、直立した4人が順に倒れ込んでいくという《四つの風》の倒壊を連想させる舞いが折り込まれている。



最後は、ダンサーたちが流されていくように転がりながら去り、舞台には能藤がひとり残される。

音は再び自然音のみとなる。身を屈め、痛みしいほどの姿で、一步一步すり足で横たわった1体に近づき、慈しむように眺め、手を翳す。先ほどまで自分が演じていた「四つの風」の1体が自然の作用を受け、長い年月の末、倒れてしまつた姿だと思うと、そこに避けることができない自らの老いへの思いも重なる。はたまた、自然を支配しようとした傲った人間の行く末の姿なのか。あるいは、自然の摂理としてのすべてのものに訪れる最期なのか。さまざまな思いを含めながら、余韻を残して暗転しステージは終わる。私はそこに希望も合わせ見た。能藤は倒れた1体を冬と称していた。四季はめぐり、春は必ず訪れる。野外美術館の《四つの風》の倒れた木にも、そこを苗床として、今新たな木の芽が出てきている。倒れ自然に帰るだけではなく、着実に次の命がつながっている。



砂澤の彫刻を用いたのは、単に形状面からではない。作品が宿す自然観に深く共鳴しながら、能藤自身の自然に対するさらに成熟した思考と、旅立つていった者への祈りが遺憾なく表れた压巻の公演であった。

※本公演に至るまでの経緯などについて、「砂澤ビッキーウィーク 連続トーク」で能藤自身が語っている(p.234-241)

撮影:伊藤留美子